

娘の死

娘との永訣について、またしても詮無き繰り言を述べて貴重な紙面を塞ぐことをお許し下さい。

このような話題は読んでくださる方の御気分を暗くするばかりなので、遠慮すべきであることは重々承知しております。楽しかるべき祭りの為の村の広場に、真っ黒い喪服の一団が群れて、たらたらといつまでも葬式をやっていて立ち去らうとしないようなものかと、内心忸怩たるものがあります。申し訳ありません。

けれども、今、私は娘の死について語るしか出来ることが何もないので。不意に、酷薄に、荒々しく眼前に突きつけられた娘の突然の死以外のことについては、私には一切が無意味であり、まるで関心がありません。ああしておけば、あるいはこうしておけば娘は死ぬことは無かったという堂々巡りの後悔から未だに、逃れることが出来ないでいます。逃れる・・そうです、いくら悔やんでも悔やみきれないことにいつまでも囚われないで、出来ることならそれから逃れたい気持ちも無いわけではありません。しかし、自分の大きな過ちの為に娘が命を失ったことを悔やまないで済む為には、現世への、あるいはそれが荒唐無稽のことならば、せめて来世への娘の復活が約束されなければなりません。あるいはまた、時間を逆に遡行して娘の生きていた時に還れるのなら、この後悔から私は逃られるかも知れません。しかしいずれもあり得ない話です。私などに人智を超えた奇跡を求める資格がある筈はないのです。

私は娘の死の意味を自分に問い続け、後悔し続けることしか出来ません。また、そうすることでやっと心の平衡が保たれているようにも思われます。そうすることで最も心に安らぎが得られると言っ気がします。

まことに勝手な話で申し訳ありませんがもう一度だけ娘の死について想うところを述べさせて下さい。

私は外科医としての仕事上、おおぜいの方々の死にかかわって来ました。この二十三年間に恐らく五百人を超す方々を見送って来ました。その多くは癌を病み、私が手術をさせて貰った方です。現にこれを書いている今、腓臓癌のS氏が衰弱の極、下顎呼吸に陥っています。多分数日以内に臨終を迎えることになるでしょう。北海道の炭鉱夫であったとのこと。元気なうちに故郷へ帰らたかっただろうし、帰してあげたかった人ですが、私に出来ることは彼の呼吸が止まり心電図が直線になった時、家族の方々に臨終を告げることし

かもうないのです。

自分が縁あつて見送つた患者さん達の「死」は、思い起こせばそれぞれに辛く、悲しいものです。けれどもいくら悲しくてもそれぞれの「死」は、私にとつてはやはり「他人の死」でした。不遜な言いかたですがその辛さ、悲しさには慣れることが出来ます。忘れることすら出来ます。しかし自分の娘の、しかも親の怠慢から生じた「死」は決してそうではありません。怖ろしいことです。

「早く子供をとりあげられたのも、あなたがたは仏様からご覧になって、この子を育てる資格のない親だとお考えになつたからだ・・・」

あまり辛いので相談に行つた田谷の定泉寺の老住職はそういつて叱つてくれました。なまじ慰藉の言葉を頂くよりも誰かから思い切り叱り飛ばされた方が気が休まる心境でしたので、ほんとに有難いと思いました。

このたび初めて知つたことですが、慰藉の言葉をかけて下さる人たちのお話では、普段明るく振舞つておられる方でもその多くの方が、家族との死別による悲しみを経験しておられるのです。そのことを知り、自分が如何に思いやりに欠けており、他人の悲しみや痛み鈍感だつたかを思い知らされました。

五時通信にしても今までに何度か死別、離別を語つておられる文章を眼にすることがありましたが、眉をひそめて読み流しただけで、それがどれ程の深い悲しみを内に秘めたものであつたかを想像出来ませんでした。全くの阿呆でした。

六月号の私の通信を読んでくださつて「他人の死」を我がことのように受け止め、涙を流し、祈り、そして慰めの便りを寄せて下さつた畏敬すべき方々に、阿呆の眼を開いて下さつた方々に、遅れましたが心からお礼を申し上げます。有難うございました。

普段多少は死について考えてきたつもりではありましたが、いざとなると私は全くの木偶の坊でした。

宗教的儀式にもまるで知識はありません。葬儀が仏式になつたのも成り行きでした。私達生者にさえ理解できないお経を死者に聴かせたところで何ほどの意味があるか、不意に物質的な身体を失つて霊になつた十六歳の娘が突然梵語を理解し、一切皆空と諦観することが出来るようになったとは到底思えませんでした。しかし夫婦親子相擁して泣き明かす一方で、ともかく葬送のかたちを整える必要に否応なしに迫られるのです。宗教の形式を借りないで、独自のやり方で供養するというエネルギーは到底湧いては来ませんでした。

紹介された寺は真言宗でした。私の父方の祖母は生前お大師様の熱烈な信者でありましたから、その意味では有縁であり、それに大天才空海にはいつの日か私も教えを願うことになつていたように思われて、仏式結構、真言宗で善かつたと考えています。しかしまだ般若心経以外の仏典には余り興味が湧かず、というより勉強不足で他の仏典も理解出来な

いでいるのです。朝夕祈つてはいますが、かなり勝手な自己流です。

現世では既に修養を積む機会を失つてしまつた死者に代わつて、生者が仏の教えを説い

て聞かせるという考え方にはまだなじみません。お経を読むよりも祈ることそれ自体が大事ではないかと思っておりますが、これも娘の為に祈るといっても自分の為に祈っているのかもしれない。しかし、お経の勉強にはいずれ取り組むことにはなるといふ気はしています。その結果、本当に仏式でよかった、形式を借りただけでなく本当に仏道に帰依する機縁になってよかったと思うかもしれません。

「娘の死」に私が耐え得たのは勿論一切皆空の悟りからではなくて、ひとの死後も靈魂は存続するという単純な、しかし理性の名によって否定され、普遍的な常識にはなり得ていない思想によってでした。

個人的な精神形成史の中では典型的な観念論として青春時代に一度は否定した筈の「迷信」が、この一大事の時、唯一の精神的な支えになりました。現在、手にしてみようかという気持ちの起る書物はとも限られていて、宇宙論、生命の起源、意識についての概説書などしかありませんが、もうひとつ心霊学の本には一番関心があります。毒々しいカルティズムは大嫌いです、真面目な心霊学はこれから先勉強してみたい領域の最たるものです。少なくとも仏典よりはよく判ります。

娘は死によって消滅したのではなく、その靈は生きて別世に在る。いずれは私達生者もそうなるのだから、死は永訣ではなく暫しの別れにすぎない。いずれ再会の時まで私はいま暫くここに残って宇宙創成のカラクリ、生命とは意識とは、などと勉強しておきたい、そんな風に考えています。悔いと悲しみを忘れる為にはこのように考えるしか途が無いということかもしれません、若しそうならばそれも可、死は総ての終わり、一切は虚無という怖ろしい深淵はもう二度と覗きたくありません。

ともかくもどうしようもない悲嘆から這い上がったいま、私が密かに危惧しているのは、あれほど全身全霊を震撼させた、自分の死よりももっと絶望的な経験であった筈の「娘の死」が、財布を失くしたとか大事な楽器を壊したとかの日常の出来事と同じく、時とともに風化し、都合よく忘れられていくことです。

いや、客観的を装わないで正確に言えば、自分にとって都合よく「私がそれを忘れる」に違いないということです。忘れることで耐えるしかないからです。

ラ・ロシュフーコーは人間には直視出来ないものが二つあるといます、ひとつは太陽、もうひとつは死。この場合「死」というのは多分自分の死のことでしょう。確かに自分の死は考えたくないことです。若い時には怖ろしくさえありました。自分が何処にも存在しなくなると想像するのは怖ろしいことでした。しかし、今の私は自分の死よりも自分の愛するものの死のほうが遥かに耐え難いことを知っています。直視出来ないのは愛するものの死であって自分の死ではありません。そして怖ろしい事が起った以上、眼をそらしてはならないのですが、情けないことに、人は眩しいものを凝視し続けることが出来ないので

娘の死が啓示していることを忘れるようなら私は二重三重に、娘に済まない事をする
ことになりそうですから、決して忘れないつもりですが、実際は少しずつ忘れていくからこ
うして日常に復帰出来ているのかもしれない。

忘れてはならなくて、しかも忘れなければならぬことが続きました。

うちも無い親の繰りごとを読んで下さった方々に心からお礼を申し上げます。有難う御
座いました。

（ 五時通信 第一三〇号 一九八六年八月 ）